令和５年度　橿原市立畝傍東小学校　学校評価総括表

１　学校教育目標	豊かな感性と実践力をもち、自ら学びたくましく生きる児童の育成
２　学校経営方針 【チーム畝傍東】	全教職員がすべての児童の育成に関わり、子どもたちの笑顔とがんばり、優しさがあふれる学校づくりを進める。教職員一人一人がプロ意識をもち、子どもたちに学ぶ楽しさを味わわせる指導を心がける。課題に対して、「チーム」として全職員が一丸となって取り組める学校を目指す。
３　前年度成果と課題	児童と保護者へのアンケート結果では、93%以上の児童と保護者が「学校は楽しい（楽しそうに登校している）。」と回答しているが、今年度も引き続き、楽しく学べる学校であるべく指導していきたい。また、年間を通した教育活動を通して、人に優しく、困難をたくましく乗り越えていける児童を育成していきたい。児童の主体性を高め、「自分はやればできる」、「自分は友達や先生、家族から大切にされている」、「自分は人の役に立っている」など、児童の自己有用感を高めることで自己肯定感を育み、何事にも前向きにがんばる児童を育成していきたい。
４　本年度の重点目標	「気持ちのよい挨拶が響き合う学校」・「子どもが明日も学校に来たいと思える居心地のよい明るく元気な学校」・「保護者や地域から信頼される学校」づくりを進める。 〇日々の授業を大切にして、基礎基本の定着及び確かな学力の育成を図る。　〇主体的・対話的で深い学びに取り組む児童の育成を図る。　〇国語科の授業を中心に、主体的に学び、考え、表現する力をはぐくむ。　〇全教育活動を通して児童の自己肯定感を育成し、夢や目標をもって何事にも前向きに頑張ろうとする意欲を高める。

５　各領域の評価

領域	評価項目	具体的な評価指標	評価	成果と課題	課題の改善策等	学校関係者評価
学校運営	校務分掌の構成と機能	各学年や校務分掌の運営が職員の協力・連携により円滑に行われ、組織として機能している。	3.8	〇「情報を共有し、共通理解を図りながら組織で対応する」という考えのもと、学校の課題解決に向けた取組をさらに進める。 〇教職員は協力的で何事にも熱心に取り組み、職員間の連携も優れているが、さらに周りへの目配りができるよう個々の意識を高めていく。 〇校務分掌について、学年主任と校務分掌部長との兼任をほぼ解消することができた。	〇校務分掌について、学年主任と校務分掌部長との兼任に関し唯一解消できていない特別支援教育部の部長と特支主任の兼任の解消に努める。 〇各部長を中心に分掌のなかで共通理解を丁寧に図り、役割分担を行い、全職員が気軽に相談できる環境づくりを行い、学校運営への参画及び協力意識を高めるようにしていく。	〇校務分掌の偏り解消も含めて、さらに働き方改革を進め、効率の良い仕事の在り方を追求してもらいたい。管理職がリーダーシップを発揮して課題解決に努めてもらいたい。 〇畝傍東小学校は教職員の負担軽減のために県からの教員加配をもらうための努力をしていることは評価に値する。
	教職員の学校運営への参画	教職員が相互理解し、協力して、意欲的に学校運営に参画している。	3.8			
	教職員集団	考えや意見を気軽に出せ、気持ちをひとつにして、楽しく元気に働ける教職員集団になっている。	3.4			
学習指導	指導方法の工夫改善	児童に学ぶ楽しさを味わわせるために教材研究を行い、教材・教具を工夫してよくわかる授業づくりをしている。	3.6	〇全教員が「わかる授業」を目指して授業方法や教材・教具等の工夫を行っている。 〇「主体的・対話的で深い学び」の推進に向け、指導力を高めていくという教員の意識は高く、職員研修で指導主事を招いて国語科における研修を深めることができた。 〇ゲストティーチャー等、地域人材活用をオンラインの活用も含めて進めることができた。次年度もさらなる活用の推進に努める。	〇自らの考えをもち、豊かに学び合う子どもの育成～主体的に学び、考え、表現する力をはぐくむ国語科学習～を研究テーマとして、次年度も教員の授業力や児童の学力向上につながる取組を推進していく。 〇研究テーマ以外の教科についても各学年単位等で授業づくりに取り組んでいくようにする。	〇授業の様子を参観させてもらうなかで、先生方が子どもの学ぶ意欲を高めるための工夫をしてくれていた。 〇児童のアンケート結果から、「自分の考えたことを全体の場で発表する」という「発信力」が弱いことがうかがえるので、子どもを褒めることを常に心がけ、そういう力を伸ばしていく指導を心がけてもらいたい。
	主体的・協働的な学びの推進	授業等で児童が発言や発表をしたり、他の児童と学び合ったりする機会を設けている。	4.0			
	きめ細やかな指導	児童の基礎的な学力を定着させるために、個別の支援などを工夫して学習指導している。	3.8			
	地域人材の活用	児童の学習理解を深めるために、ゲストティーチャー等地域の人材を効果的に活用して授業づくりをしている。	3.9			
生徒指導	あいさつ運動の推進	元気な挨拶ができる児童が増え、挨拶が交わせる学校になってきている。	3.4	〇児童と保護者に行ったアンケートからは、挨拶ができているとの回答が児童、保護者ともに8割程度あるが、まだまだ十分とは言えないので、さらなる指導や働きかけが必要である。	〇挨拶や規範意識については、家庭の協力も得ながら、教職員からの指導や働きかけを積極的に行っていく。	〇見守り等をしているなかで、挨拶は良くなってきているように感じている。これからも粘り強い指導をお願いしたい。
	規範意識の醸成	素直に自分の言動を振り返り、学校の約束事や社会ルールを守ろうとする意識が児童に身についてきている。	3.5			

領域	評価項目	具体的な評価指標	評価	成果と課題	課題の改善策等	学校関係者評価
生徒指導	いじめ問題への対応	いじめに関する児童の悩みを早期に発見し、個別面談を重視して、迅速に問題解決を図っている。	3.9	○問題行動等への対応は情報を共有し組織的に対応しており、全体での情報共有を毎週実施する体制が定着している。重大事案はケース会議を必ず行うようにする。 ○避難訓練だけでなく、緊急下校等、有事の際のフローチャートの共有をきちんと行う。 ○定期的にいじめアンケートを実施し、児童との面談を重視して、早期対応・早期解決を進めている。	○次年度も今年度の体制を維持し、積極的な生徒指導に努める。 ○危機管理体制の充実のため、学校で指導・対応できることの範疇を超える場合は他機関の協力を早期に要請し、対応等にあたる。	○日頃の生活や授業等を通して、道徳心をきちんと教えてもらっていることがアンケート結果からわかる。規範意識を身につけることは自信（自己肯定感）を高めることにもつながると思うので今後もきちんとした指導を継続していってもらいたい。
	危機管理体制の確立	地震や火災などの自然災害と、不審者対応などのマニュアルを作成し、研修や訓練を継続している。また、「緊急時の対応確認書」を集約して緊急時に備えている。	4.0			
	組織的な生徒指導の推進	全教職員の協力体制のもと、問題行動への適切な対応や予防的な取組を推進している。	3.4			
健康・安全教育	けが等の適切な対応	計画的に保健指導を行い、児童のけがや病気等に対して保護者や医療機関と連携して適切に対応している。	4.1	○保健室に来る児童が多いなか、養護教諭を中心に、けがや病気に対する保護者や医療機関ときちんと連携することができた。 ○エピペン研修等も実施し、アレルギー等の情報共有及び対応をきちんと行うことができている。	○次年度も今年度同様、引き続き連携を大切に、安全指導や研修を計画的に実施していく。 ○外部講師を招いての研修も企画していく。	○教職員ならびに関係機関との連携を大切に、これからも児童の安全確保に努めていってもらいたい。
	学校内外の安全指導	登下校指導や避難訓練等を年間計画に位置付け、学校内外の適切な安全指導を行っている。	4.0			
	食物アレルギー・救命対応	水泳指導や食物アレルギーなどの安全対策を行い、緊急に対応できる体制を整えている。	4.1			
職員の指導力向上	職員研修の充実	教職員の力量を高めるために計画的に研修を実施している。（教科指導・人権教育・特別支援教育・ICT教育・生徒指導・道徳教育・外国語教育・新学習指導要領の評価等）	4.0	○研究部を中心に国語科における研修を計画的に進めることができた。 ○公開授業についても実施し、研修を深めることができた。 ○研究授業が学校行事が多い10～11月頃に集中していたので、次年度は実施時期を工夫する必要がある。 ○若手教員が多いなか、日々の実践におけるOJT研修を中心に教員の育成を進めているが、まだ十分とは言えない。	○次年度も研究部を中心に、国語科における研修を進める。 ○国や県の学力調査結果を分析し、国語科の授業研究等に引き続き取り組み、授業の質を高めていく。 ○学年の枠を超え、ふだんの授業をお互いに参観しあえる取組をすすめていく。	○子どものやる気を引き出すのは、やはり教職員の指導力にかかっているところが大きい。今後も研修に努め、子どもの自己肯定感を高めるような声かけを大切にしながら、自己の指導力を高めていくよう努めてもらいたい。
	研究の推進	研究テーマを設定して、効果的・効率的な部会運営を行い、指導法の工夫・改善や教材開発等の研究を進めている。	4.0			
	授業力向上研修の充実	わかりやすい授業を行うために、全職員参加の公開授業や研究協議を行い、授業力向上を図っている。	4.1			
豊かな教育活動	読書活動の充実	年間を通して、読書タイムや読書指導等を行い、本に親しみ、楽しく読書ができる児童を育成している。	3.0	○児童アンケートでは「たくさん本を読んでいるか。」との問いに対して、7割近くが肯定的な回答をしているが、全国学力状況調査等の結果も踏まえ、読書習慣を身につけさせる指導が必要である。 ○今年度は全校マラソン大会を実施することができた。感染症拡大防止のため、縦割り活動等の取組をあまり進めることができなかった。	○次年度は本校の特色ある教育活動である縦割り活動（かしのみタイム）などを工夫しながら可能な範囲で行う。 ○体力向上に係る取組を工夫して行う。 ○キャリアパスポート等を活用しながら、キャリア教育のさらなる推進を図っていく。	○読書活動に課題がある。先生も一緒に読書をするなどの活動を通して、子どもの「読書の習慣づけ」につなげてもらいたい。 ○将来の夢や目標、チャレンジ精神を育む素地を教育活動の中で培っていけるような指導の在り方を考えていってほしい。
	児童の体力向上	体育の授業等を中心に、児童の体力向上を図り、体を動かすことが好きな児童を育成している。	3.6			
	コミュニケーション力の育成	日々の教育活動や行事等を通して、主体的にコミュニケーションをとろうとする児童を育成している。	3.5			

領域	評価項目	具体的な評価指標	評価	成果と課題	課題の改善策等	学校関係者評価
豊かな教育活動	キャリア教育の推進	発達段階に応じた体験活動を通して、働くことの楽しさや大切さを理解させ、積極的に役割を果たそうとする児童を育成している。	3.4	○ICTサポーターのサポートのもと指導を行うことができた。 ○各児童・教員1台のタブレットやパソコン等が導入され、授業での活用が進んでいるが、教員の指導力の向上をさらに図っていく必要がある。 ○各学年と連携した食育指導により、児童の食に関する意識が高まってきている。	○ICT教育研修等を計画的に実施することにより、教職員のICT活用の意識やスキルアップを図っていく。 ○次年度もインフルエンザ・コロナ等の感染症拡大予防対策を講じながら、食育を推進していく。	○授業の様子を参観させてもらうなかで、タブレット等のICT機器を当たり前のように使いこなし、子どもたちが生き生きと活動している様子が見えた。今後もよろしくお願いしたい。
	ICT教育の推進	児童がコンピュータの操作に慣れ親しみ、学習で活用できるようにICTサポーターと連携して指導している。	3.9			
	食に関する指導（食育）	学校は、低・中・高学年の発達段階に応じた食に関する指導を行い、食事の大切さや楽しさを理解させている。	4.1			
人権教育	人権教育の推進	豊かな人権感覚をもった児童を育てるために、すべての教育活動を通して、発達段階に応じた指導を行っている。	3.6	○人権教育の年間計画を立てて人権教育を進めている。 ○人権に関わる問題事象が起きた時には迅速かつ適切な指導を行っている。 ○週1回、全教職員で全児童の共通理解を行う時間を設定することにより、課題のある児童等への理解を深めることができた。	○全教育活動を通じて、児童の発達段階に応じた取組を計画的に行い、自分の思いを相手に伝え、また相手の気持ちも理解できる児童を育て、なかまづくりを進め、子どもと教職員の人権感覚のさらなる向上を図る。	○授業内容・方法の充実に努めることはもちろんのこと、ゲストティーチャー等もどんどん活用しながら、子どもたちの人権意識を高める指導を日々心がけて取り組んでもらいたい。教員が自己の指導力を高めるための努力をすることも必要である。
	人権意識の高揚	お互いのちがいを認め合い、相手の気持ちを考えた言動をしようとする意識や態度をもった児童を育成している。	3.6			
特別支援教育	個別の支援計画の作成と実施	支援が必要な児童の個別の指導計画や教育支援計画を作成し、教職員が連携して支援している。	3.6	○全教職員の協力体制のもと、ケース会議を開き、特別支援教育の充実に向けて取組を進め、養護学校との交流等を行った。 ○関係機関からの支援や連携をさらに進めていく必要がある。 ○明日香・大淀の各養護学校との連携を進めることができた。	○学校及び児童の課題を共有しながら、特別支援教育の充実を図っていく。ケース会議の内容の共有もしっかりと行う。 ○コーディネーター複数配置を追求し、コーディネーター育成等に向けた取組を進めていく。	○関係機関との連携をこれからも深めながら、子どもへの丁寧かつきめ細やかな支援に努めてもらえればと思う。
	校内委員会や支援体制の整備	支援を要する児童について共通理解を図り、全教職員の協力体制のもと、ケース会議を必要に応じて開催し、支援につなげている。	3.6			
	家庭や関係機関等との連携	特別支援教育コーディネーターを核として、家庭や関係する特別支援学校、関係機関と適切に連携している。	4.0			
家庭地域との連携	学校支援ボランティア活動	学習活動（読書等）の支援や児童の登下校見守り、環境整備など、保護者や地域の方々と連携を図っている。	3.8	○登下校の見守りや、図書ボランティア、学習支援（実習）に40名以上のボランティア登録があり、教職員一同たいへん感謝している。	○今後もホームページや学校・学年・学級だより、コドモン送信等を活用して、タイムリーな情報を公開していく。ホームページの周知も必要である。	○学校のホームページはきちんと更新されており、内容もわかりやすい。 ○次世代のボランティア育成が課題だと感じている。
	情報提供	保護者や地域住民に、学校・学年だよりやホームページ等の公開により、積極的に情報提供を行っている。	4.0			

評価について	教職員の自己評価・・・項目ごとに、【 4・・・よく当てはまる、3・・・まあまあ当てはまる、2・・・あまり当てはまらない、1・・・全く当てはまらない 】を平均した数値

6　総合所見（学校関係者評価を含む）

○今年度も感染症拡大予防に努めつつ、ゲストティーチャーを招いての学習や全学年における本の読み聞かせ、フィールドワークの実施等、各学年において豊かな教育活動の充実に係る取組を行うことができた。引き続き、学校行事等の精選を図り、授業時数の確保や授業内容の充実を図るとともに、教職員の働き方改革を進めていく。
○今年度からは、自らの考えをもち、豊かに学び合う子どもの育成～主体的に学び、考え、表現する力をはぐくむ国語科学習～を研究テーマに設定し、教員の授業力をさらに高め、学力向上に向けて「わかる授業」づくりに取り組んだ。今後も、全教育活動を通して、自ら学ぶ意欲をもち、たくましく自己の進路を切り開いていける児童を育成できるように努めていく。
○様々な課題や保護者対応では、担任一人で抱え込まないで学年集団「チーム学年」での対応を基本に、必要に応じて管理職、生徒指導担当、養護教諭、特支コーディネーターなどとケース会議を設定し、対応することで解決に結びつけている。次年度も組織的な対応ができるように日頃からのコミュニケーションを大切にし、各学年の情報を共有するための共通理解の時間を毎週きちんと設定し、信頼関係を深めていけるようにしていきたい。また、本校で増加傾向にある不登校児童への対応等について全職員で研修を受け、考える機会を設定し、その解消に努める。